ベトナム・ハノイ旅行記　（２０１７．１．２１～２４）

ハノイは初めての訪問地である。友人が２家族滞在しているので今般クアラルンプールから３泊４日の自由旅行を企画した。最近は自由旅行が多いが、しかし訪問地に友人がいることが望ましい。因みにハノイの犯罪率は低いが、交通事故は高く年間４万人も亡くなっているそうだ。現在の為替は１万ドンが 47 円。円の 200 分の 1。またＵＳ＄が多用され、ショップによっては＄払いが原則のところもあった。さてベトナムには１０年前ホーチミンに出張したことがある。その時の思い出は、道路が自転車とバイクの洪水のようであった。ハノイは自転車が自動車に変わったがバイクが主流だった。

１月２１日（金）

マレーシア航空でハノイ空港には 12 時に着いた。入国審査に 30 分超かかりスーツケースをとって外に出たのは 13 時過ぎだった。空港内の銀行ＡＴＭを探したが見つからないので、近くのインフォーメイションカウンターに尋ねたところ、逆にタクシーならクレジットカードで買えると言われた。空港からヒルトンオペラホテルまで往復＄４５との回答なので購入した。帰りはホテルに迎えに来るとのこと。女性スタッフは英語堪能で親切であった。

14 時に友人Ａと会うことになっており、ぎりぎり間に合った。まずはホアンキエム湖に近い「リトルハノイ」というカフェで軽食をとった。ベトナムは世界第２のコーヒー生産国だ。街中にカフェがあり、100 メートル歩けば１０軒が目に入る。友人によればカフェを利用するベトナム人も多いらしい。その味は少し苦くて濃厚ミルク入りにすると甘過ぎるように思えた。

その後、１６時開演の水上人形劇を観た。１４の芝居が演じられたが、侵略軍を撃滅する際に神様からもらった剣をまた湖の神様に還すという物語はおもしろかった。日本の人形浄瑠璃のようだが水上で操作されているのが特徴だ。亀や龍や麒麟などベトナムで有名な動物が登場する。音楽とのコンビネーションも素晴らしいものだった。

その後ホアンキエム湖を散歩した。結婚直前のカップルが記念写真を取る光景が多かった。その内のカップルと一緒に写真を取らせて頂いた。(写真ご参照)

夕食は友人Ｂ夫妻の紹介でグエンタン（ＮＧＵＹＥＮ　ＴＵＡＮ）という外人に人気のあるベトナム料理店に行った。イカの揚げ物とフォーが美味かった。ベトナムの物価は概ね日本の

３分の１だ。食事はもっと安いかもしれない。

なお友人Ｂは大学時代ＥＳＳだったので英語が堪能だ。親の介護で関西を離れることはなかったが、海外駐在への思いは深く退職後に日本語教師の資格（４００時間余の受講が要る）取り、２０１６年８月ベトナム研修企業に転職した。奥さんも同じく日本語教師の資格をとり夫婦で働いている。

１月２２日（土）

朝８時にＢ夫妻が以下の３か所を運転手つきハイヤーで案内してくれた。

① 文廟、②ホーチミン廟、③タンロン遺跡、

１番目の文廟には孔子が祭られている（写真ご参照）。中国官僚制の基盤である科挙制の最終試験場になったところだ。ベトナムと中国の関係は深くて長い。西暦０年から１０００年ごろまで中国の植民地であったので中国の伝統文化が根付いている。友人はベトナム人のＤＮＡは中国人だと言っていた。

ここで小学生の集団と遭遇した。我々が日本人だと言った時、歓声が挙がった。友人によれば、中学では第１外国語として英語は必須だが７５％の学生が第 2 外国語として日本語を履修しているとのことだ。因みに中国語、フランス語、韓国語は履修科目にない。先週安倍総理がハノイを訪問し、２月には天皇陛下も訪問する予定だ。ベトナム人の親日度が更に高まることは間違いないと思えた。

２番目はホーチミン廟を見学した。旧正月前の土曜なので広場全体が相当飾り付けが進んでいた。そして幸運にもホーチミン廟の中に入ることが出来た。物々しい警官に守られたホーチミンの死に顔は荘厳だった。友人Ｂは３度目の訪問だが初めて廟の中に入れたとのことだ。２か月前は工事中だったが、今回観光名所としての設備が完備された。入室時に持ち物カバンは保管され退出時に受け取るようになった。敷地内は草花で占められ、ホーチミンの執務室、会議室、愛用の自動車（写真ご参照）などが展示されていた。ホーチミン自身は生涯質素であったようで国民の人気は今も絶大であるようだ。

３番目に見学したタンロン遺跡は日本の観光コースには余り紹介されていないそうだ。見学に２時間は優にかかるだろう。しかしこの遺跡は２０００年前のベトナム文明を物語る陶器や瓦の他に、１９４５年の仏印独立戦争、アメリカとの南北戦争、中国との国境戦争に勝ち抜いた歴史が刻まれている。地下防空司令部には当時の戦略地図や通信機器が展示されていた。大変貴重な資料だと思った。（写真ご参照）

歴史は現政権の正統性を国民に教え込む重要な手段である。ベトナムの輝かしい歴史は２０世紀独立戦争から始まっていると教育している。幸いにもベトナムには誇れる戦勝の過去がある。

ここで大学の卒業記念撮影集団に遭遇した。（写真ご参照）　学生の眼は明るく輝いていた。ヤンゴンやプノンペンと同じ風景だ。東南アジアの国々の平均年齢はどこも若く、若人の無邪気な姿を見ると嬉しくなる。

現在共産党政権は外資による産業政策に熱心だ。ベトナムはマレーシアと共にＴＰＰ参加国でもある。また「タンロン」とはハノイの旧称である。

ランチは、オバマ大統領も訪れたというブンチャーレストランの「ＨＵＯＮＧ　ＬＩＥＮ」で済ませた。ここで友人Ａと再度合流した。Ａ氏は外務省の外郭団体である国際協力センターから１年間派遣されている。東京銀行（現ＢＴＭＵ）を退職後、地銀に数年間出向転籍し、６０歳から日本文化の伝承役として海外単身赴任生活を続けている。既にヒューストン、バンコクにも赴任しており、今回３回目のボランティアである。地元の中学校でベトナム教師と協力して週１４コマの授業を担当しているそうだ。

午後は、オペラハウス近くのハイランド・コーヒーで一服した。そしてキエム湖の北側にある旧市街を散策して土産品として刺繍入りの袋をいくつか購入した。最後に湖が一望できる隠れ家のようなカフェ（地上５階のルーフ）で一服した。

１月２３日（月）

ハロン湾ツアーのため７：２０にニッコーホテルに向かう。参加者２２名と８時前にハロン湾に出発した。日本語ガイドは２人でバスの運転手も２人いた。ハロン湾までの距離は約１５０キロだが高速道路は３０キロで残りは一般道路であった。舗装はされているが生活道路なので平均速度は４０キロ程度。車窓からは、イオンモール、石炭火力発電所、田園風景などが見えた。途中４０分のトイレ休憩と「土産店」を見学し、正午頃に到着した。

ハロン港に着くと旅行会社がチャーターした貸切り遊覧船に乗りこんだ。船上で食事しながら観光した。なお入場料には１９万ドンの入場料がいる。鍾乳洞見学にはこのチケットが必要だった。ハロン湾は世界遺産で「海の桂林」と言われるように静かな海と奇岩の島々で囲まれている。約２千もの島々は殆ど無人島とのことである。そして巨大な鍾乳洞も名物である。＜写真ご参照＞

１月２４日（火）

ヒルトンオペラホテルで最後の朝食をとる。このビュッフェは相当高級だ。中華、欧米、ベトナムが中心で日本料理は余りない。不味くはないが余り「美味い」というものもないのが感想だ。

ハノイ空港まで市内を抜けるのに相当時間がかかった。余裕を見て出発したので良かった。運転手は３日前と同じ青年で、親切で誠実だった。ハノイ旅行であまり不安は感じなかった。

マレーシアのクアラルプール到着は１７：３０だった。空港から市内ホテルまでの道路は大渋滞だったので 90 分もかかった。

＜ベトナムについての雑感＞

１、　国民性は中国のＤＮＡだが反中意識が強い

友人によれば、根っこのところで素直さに欠けるそうだ。誤りを認めず正当化する性質がある。そして反中意識は強い。中国とは国境紛争の長い歴史がある。また反韓意識である。東南アジアの国々の中国と韓国への評価は概ね同じだ。

２、　女性は全て働く（自宅に主婦はいない）

共産党政権は経済成長を推進している。やはり国民の生活向上が政権安定の第一条件であるのはどこも同じだ。その原動力に女性の働きがある。ほぼ全ての女性が結婚後も働くそうだ。そして育児は両親が担うとのことだ。

３、　賄賂が支配する社会（教員の給与は安い）

党と官僚が支配する国である。学歴と出世は余り関係なく、コネ社会であり賄賂が横行している。従って大学進学熱は高くない。ただ理工系大学だけが社会の上層部に上れる煙突と言われている。

４、　４０００年の歴史と独立戦争

ベトナムの輝かしい歴史は１９４５年以降とのことだ。学校では現代史が中心だとのことだ。

５、　キンカンと桃と蓮（ロータス）はおめでたい植物

キンカンは黄色で豊さの象徴。桃もおめでたい花で旧正月に飾られる。蓮は国花である。

６、　言語は１１の母音と６種類のアクセント

ベトナム語は大変難しい。英語もまだまだ通用していないので外国人にとってコミュニケーションは難しい。

７、　大気汚染は酷い

スモッグは酷くバイクを運転する人は殆どマスクを付けていた。バイクと自動車の比率は７：３くらい。

（2017.2.16 記す）